

早熟な大人へ
なる勿れ

126

名古屋J.C 60年の歩み
長坂 英生

子どもたちへの「贈り物」

「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしているところから判断すると、子どもたちは朝から晩まで幸せであるらしい」
平成17年(2005)1月18日、名古屋観光ホテルで開かれた第55年度名古屋J.C 1月例会の新年賀詞交歓会式典。壇上に立った新理事長の加藤徹は所信表明で、明治期に日本で暮らした米国人生物学者モースの言葉を引用した。

モースの描写からは、現代と比べて経済的にも物質的にも恵まれていなかったはずの明治の子どもの幸せそうな様子が目に浮かぶ。現代の子どもたちと明治の子どもの……。本当に幸せな人生を歩んでいるのはどちらなのか？
「今の子どもたちが大人になったとき、彼らはいったい何を思い出すことができるのか？」



加藤徹第55年度名古屋J.C 理事長

加藤は会員たちに根源的な問いを投げかけた。
30年後の理想的な明るい豊かなまち・名古屋を目指して、「J.Cの持つ「つながり」を活かして「豊かな記憶」を後世に伝える運動を展開したい。そんな思いを込めて「取り戻そう豊かな記憶 駆け抜けよう青春を今『未来の夢』に向かって」をスローガンとした。
当時を振り返り、加藤はこう話す。「J.C活動はリーダーとなる人々の研修の場。ではリーダーと何か？ それは将来を担う子どもたちに明るい豊かな社会という『贈り物』をする人々であると考えました」
「親子の年齢差はおおむね30歳。私の父もそうだったと思いますが、子どもが生まれた時に親は、この子たちに住みよい世の中を残したいと考える。それが幸せであり、人としての使命。おそらく名古屋J.Cの歴史の先輩たちも、そうした想いで頑張ってきたと思います」
20年後、30年後の「明るい豊かな社会名古屋」の種をまけ。加藤率いる第55年度名古屋J.Cの行く手には愛知県で開かれる国家プロジェクトが控えていた。

(題字は公益社団法人名古屋青年会議所
第60年度理事長・杉本高男氏)
(敬称略)

早熟な大人へ
なる勿れ

127

名古屋J.C 60年の歩み
長坂 英生

自然との共生

平成17年(2005)の第55年度名古屋J.C 理事長加藤徹は第46年度(平成8年)に入会した。父の勧めだった。加藤の父はJ.CのOBではなかったが、異業種の人々と交流して人脈を広げるのによいであろう」と加藤に入会を勧めたのである。
「入会して正直、びっくりしました。J.Cソングを全員で歌うなど宗教団体みだいだと思いましたが(笑)。当初はJ.Cの活動を斜に構えて見ていたところが、ありました。しかし先輩に恵まれました。私の特性を見極めて『お前ならばここまでできるはず』と背中を押していただき、チャンスを与えていただきました」
入会2年目の平成9年(1997)5月例会が加藤にショックを与えた。
例会ではネットワーク「地球村」の高木善之が「地球は今：我々の使命とは」と題して講演した。タイオキシン、遺伝子組み換え、地球温暖化など深刻化する環境問題の現状が報告された。



6月例会「豊かな自然が一番の宝物」

「企業経営と環境について考えさせられました。生きることは経済活動だけではなく、幸せには多様性があることを学びました」
愛知万博の誘致が決まった1997年、名古屋J.Cは地球環境や「共生」をテーマにした事業に取り組んだ。そうした事業を通して環境問題への思索を深めた加藤は、くしくも愛知万博開催の年度に名古屋J.C 理事長を務めることになったのだ。
「例年であれば、例会は全方向的に各分野にわたるテーマを取り上げますが、万博の年なので年間を通して『共生』や『環境』をテーマにしました」(加藤)
日本古来の自然と精神性、地球規模の自然、自然を相手にした仕事、都市と山村の関係、川と水、街づくりなど、5年後の現在から見ても、参加したくなる充実した講師陣によるセンスの良いテーマが並ぶ例会であった。
「このテーマならば、この講師を」と私なりに考えは持っていました。そこは各担当委員会に任せました。私が気付かなかった切り口があり、市民の皆さんの関心も高かった。担当者には頑張っていたらと思います」(敬称略)

(題字は公益社団法人名古屋青年会議所
第60年度理事長・杉本高男氏)

早熟な大人へ
なる勿れ

128

名古屋J.C 60年の歩み
長坂 英生

五感で感じる

平成17年(2005)6月21日。夜の帳が下りると久屋大通公園のテレビ塔下に1200本のキャンドルで灯された回廊が出現した。
夏至の日に、ゆったりとした時間を過ごし、環境や本当の豊かさを考えてみよう」と第55年度名古屋J.C (加藤徹理事長) が企画した。会場では市民1000人によるゴスペルコンサートが開かれた。観客らはリズムに合わせて踊ったり、手拍子や拍手を送り会場全体が一体となって「豊かな時間」を共有した。
「環境問題」というと、とくく難しくなりがち。楽しいこと、気持ちの良いことをしながら自然との共生を考えてみよう」と企画しました。加藤は振り返る。この企画は現在、大学生の組織「なごやユニバーサルエコユニット」に引き継がれている。
環境をテーマにした愛知万博に呼応して、この年度の名古屋J.Cは様々な事業を行ったが、その内容は「楽しさ」と「五感で感じる」ことを心がけた。
6月、7月、9月には「棚田100選」



坂折棚田での農業体験

に選ばれた岐阜県恵那市の坂折棚田で小学4年生から中学3年生までの子どもを対象にした田植え、収穫体験を行った。最後の収穫では子どもたちが植えた稲の発音が遅れて、代用の稲を収穫したが、それは逆に自然が人間の予定を簡単に裏切る厳しさを持っていることを体感することになった。
子どもたちは毎回、自然の中で保護者たちの作ってくれた弁当を食べることを楽しみにした。終了時には、子どもたちは「これが最後の？」と悲しみ、感動のフィナーレとなった。
愛知万博エントリ事業としては、7月14日から25日に掛けて、会場内のモリゾーキックロメッセで「地球を守れ！愛・レインジャー君の勇気が地球を救え」と題して幼稚園・保育園児から小学校低学年を対象に「日本の心」を体感してもらう事業を開催した(日本J.Cと日本国際博覧会協会と共催)。
また7月7日の7月例会「創造しよう『未来基準』、伝えよう『豊かさの記憶』」都市と山村の在り方の新しい価値観の提言」は名古屋市の愛知万博さしまサテライト会場の市民企業参加ゾーンで開催した。(敬称略)

(題字は公益社団法人名古屋青年会議所
第60年度理事長・杉本高男氏)

早熟な大人へ
なる勿れ

129

名古屋J.C 60年の歩み
長坂 英生

J.Cスピリッツ

愛知万博関連の事業がメインとなった平成17年度(2005)の第55年度名古屋J.C (加藤徹理事長) だったが、日本J.C関連の大きな事業があった。
愛知万博が開催されたこともあって長年、横浜で開催されてきた日本J.Cのサマーコンファレンスを名古屋で開催したのである。
「New Generation」が日本を変えていく。今、ここから社会変革の鼓動が広がる。をテーマに7月21日から24日に掛けて名古屋国際会議場で開催されたサマーコンファレンスには国内外のJ.Cメンバー約1万人が参加した。
本来の会議のほかに会場では名古屋の食文化や土地柄を知ってもらうコーナー、企画を設けてもてなした。J.Cマン以外の一般市民も楽しみ、名古屋J.Cの活動を全国に発信した。



加藤徹第55年度名古屋J.C 理事長

一方、池田佳隆第54年度名古屋J.C 理事長の日本J.C 会頭選挙にもまい進し、第55代日本J.C 会頭に送り出したのもこの年度であった。
対内的には会員同士のコミュニケーションを深める心のつながり運動を行った。この年度から入館した名古屋J.C 会館内に情報や知識を共有するための掲示板や文庫を設置、加藤をモチーフにした「最近どう？」シールを作り、会員の携帯電話やパソコンに貼られた。力を入れた機関紙「ガイヤ心フォニー」でJ.Cの活動を内外に発信したのもこの年である。
「J.Cは40歳で卒業しますが、J.Cスピリッツは永遠のもの。私は今もJ.C精神を持って、PTA、地域の仕事、会社で30年後の明るい豊かな社会」を目指しているつもりです。後輩たちにはお互いに頑張りましょうと言いたい」とエールを送る。
来年の全国会員大会については「『やささ感』があっただけはもったいない。楽しみを見つけてください。そして来ていただいた全国の会員に楽しんでいただくこと。そうすればもてなす側も楽しいはず。今後の人生の友を見つけられるかもしれない」
加藤は、今も「つながり」を大切にしている。(敬称略)

(題字は公益社団法人名古屋青年会議所
第60年度理事長・杉本高男氏)